

6 1981 報告書近刊予定。

1982年度調査。『千葉県文化財センター年報』

8 1983

田井知二「千葉急行線内草刈貝塚で発見されたイノシシ頭骨と焼土堆積遺構について」『研究連絡誌』6 1983

14) 右下肢骨の状態は、左大腿骨の長さから推測すれば、右膝蓋骨で土坑の壁面に接してしまい、それ以下を伸ばすことは不可能と思われる。左下肢骨と同様であると考えるのが妥当だろう。

15) 中央のピットが柱穴であり、これに柱を埋めて上屋がけを行なった場合、それを補助的に支える柱は、底面に穿つより、上面の周囲に穿った方が有効と思われる。

16) 柱状痕跡・柱痕跡が貝層中に検出された遺跡としては、前期関山期の松戸市幸田貝塚・中期加曽利E末期の千葉市中薮遺跡(1985年度調査。今泉潔氏御教示。)があげられる。いずれも住居内堆積貝塚で、幸田貝塚では床面に山積みされた貝塚が、上屋構造のあるうちに堆積した証左と考えている。いずれも柱穴の位置と一致

したり、住居上屋構造以外の柱構造を想定したり、本遺構の場合とは性格が異なるようである。

前田潮他「幸田貝塚第3次調査概報」1973

前田潮「貝塚にみる縄文人の精神生活」『縄文人の精神生活』歴史公論94 1983 古里節夫他「島崎遺跡・幸田貝塚(第10次調査)」1984

17) 関根孝夫「貝塚覚書」『日本史の黎明』八幡一郎先生頌寿記念考古学論集 1985

18) 西村正衛「埋葬」『日本の考古学 縄文時代』1965

(追記) 脱稿後、民俗例に基じるしとしてたてられたものがあるのを知った。それは息つき竹と称し、竹を土盛に立てるもので、①竹を通して死者の霊魂が出てゆく。②竹を通して死者が蘇る。という相反する説明がされている。縄文時代の本例とのつながりは全く実証できないので、その解釈はあてはめられないが、竹が腐朽した場合、本例の様な痕跡をのこすと思われる(井之口章次「仏教以前」1954『葬送墓制研究集成 第4巻 墓の習俗』1979に所収)。

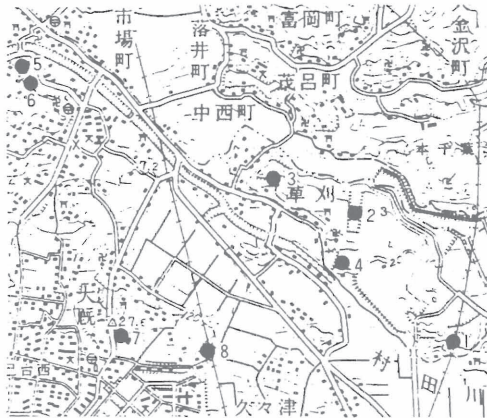
(第2班 千葉東南部事務所)

川焼台遺跡出土の2号銅鐸について

相京 邦彦・白井久美子・金子 進

1. はじめに

ここで紹介する小型銅鐸は、昭和60年6月5日



1.川焼台遺跡 2.草刈遺跡A区 3.草刈1号墳 4.草刈3号墳
5.新皇塚古墳 6.菊間遺跡 7.大厩古墳群 8.大厩遺跡
第1図 周辺主要遺跡位置図(千葉1/50,000)

に出土したものである。川焼台遺跡では昭和58年10月12日にも1点出土しており、すでに資料紹介がされている(註1)。同一遺跡から2点の小型銅鐸が出土したのは、全国で初めてである。

川焼台遺跡は、村田川の北岸段丘上に立地している。標高は約40~45mである。北側の支谷は「じんべえ支谷」と呼ばれ、西方に開析し、草刈遺跡・中永谷遺跡の間をぬけ、茂呂谷へつづき、村田川に流入している。

昭和58年に草刈31・32号墳を調査し、1号銅鐸を32号墳墳丘下の調査中に検出した。この古墳の立地する台地には川焼台遺跡の一部として考えられる集落が展開しており、現在では1号銅鐸の出土遺跡は川焼台遺跡としている。川焼台遺跡は、確認調査を昭和59年1月から3月まで実施し、昭



第2図 川焼台遺跡全体図（昭和60年12月現在）

和59年8月から本調査を開始した。調査対象は集落部分の約30,000㎡と古墳10基である。昭和59年度には集落部分の6,000㎡が調査され、昭和60年度には集落部分10,000㎡と古墳5基の調査が予定されている。現在までに、先土器時代の遺物、縄文時代の小竪穴遺構75基と竪穴住居跡7軒、弥生時代後期の竪穴住居跡51軒、古墳時代前期の竪穴住居跡69軒、古墳時代後期の竪穴住居跡200軒、奈良時代の竪穴住居跡12軒、時期不明の竪穴住居跡54軒、堀立柱建物跡18棟、方形周溝状遺構3基が調査されている。古墳は5基が調査され、6世紀前半から後葉に築造されたものと推定されている。また、上総国分寺出土瓦と同系の二十四葉単弁蓮花文鑑瓦・均正唐草文字瓦・男瓦・女瓦・埴瓦・鬼瓦が出土している。

2. 周辺の遺跡

川焼台遺跡と細尾根で続く草刈遺跡（註2）は大複合遺跡で、縄文時代中期の集落と貝塚、それに弥生時代後期から古墳時代の集落と前方後方型周溝墓等が調査されており、出現期古墳との関係が注目される。また、草刈遺跡F区（註3）では弥生時代中期宮ノ台期のV字溝を伴う大集落が調査されている。村田川に面する段丘上には、草刈3号墳（通称六ノ台大塚）（註4）が、川焼台遺跡の南

斜面には、川焼瓦窯跡（註5）が所在している。村田川の対岸には、弥生時代中期のV字溝を有する大厩遺跡（註6）や、おなじく弥生時代中期の方形周溝墓を検出した菊間遺跡（註7）が所在している。村田川の南岸は菊間国造の本拠地と推定されており、新皇塚古墳（註8）や菊間古墳群（註9）が所在している。川焼台遺跡の発掘調査は、本地域の古代文化を解明するうえで貴重な資料を提供するものと思われる。

3. 調査の方法と銅鐸の出土状況

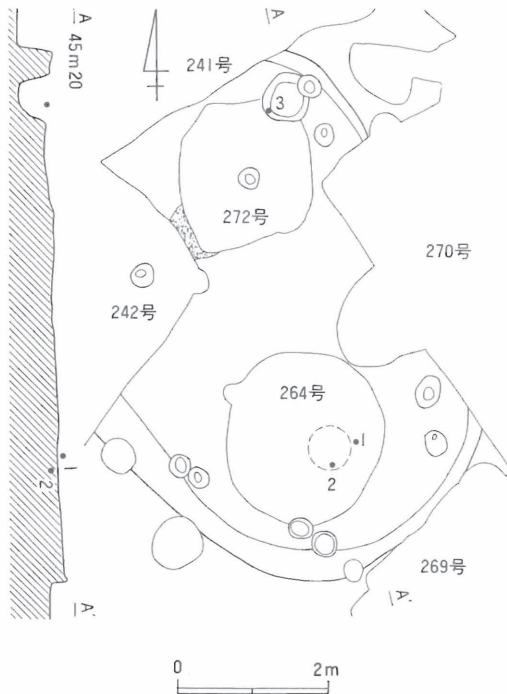
川焼台遺跡は、先土器時代から奈良時代にかけての複合遺跡で、各時代の遺構が複雑に重複している。そのため、遺構ごとの調査が実質的に不可能であったので、原則として一辺40mの正方形を大グリッドとし、大グリッドを一辺10×10mの中グリッド16個に分け、さらに中グリッドを5×5mの小グリッドに分けて調査を進めている。

2号銅鐸はF4-12-②グリッド内から出土した。出土が確認された段階で銅鐸の帰属する遺構の検出につとめ、278号住居跡床面からの出土が確認された。住居跡の平面形は推定一辺6.8×5.2m（残存6.35×5.2m）の小判形に近い形を呈している。柱穴は、2本1組となる4組と単独の2本の計10本が検出されている。また、北東隅と南壁わきか

ら浅い落ち込みが検出された。炉跡は中央やや北に所在しているが、242号住居跡および272号土壌によって切られている。床面は軟弱で、床は住居跡中央から壁に向かって緩やかに立ち上がる。銅鐸は、鈕を北西に向け、住居跡の床面にほぼ接した状態で出土した。B面（型持孔が1個ある面）を上にし、やや斜めに傾いた状態であった。278号住居跡には、縄文時代の土壌（264号遺構）と古墳時代後期の272号土壌が重複しており、その範囲の柱穴は明確でない。銅鐸の西には径0.5～0.6mの浅い落ち込みの所在が推定され、管玉が出土している。北東隅に所在する小土壌からは、古墳時代前期の壺形土器口縁部とガラス小玉が出土している。

4. 出土遺物について

2号銅鐸 裾や鱗の一部に破損がみられるが、ほぼ完形である。色調は黒みがかかった青緑色を呈している。2号鐸は鐸身・鈕・鱗からなっており、総高9.9cm、鈕高2.6cm、鐸身高7.3cmをはかる。鐸

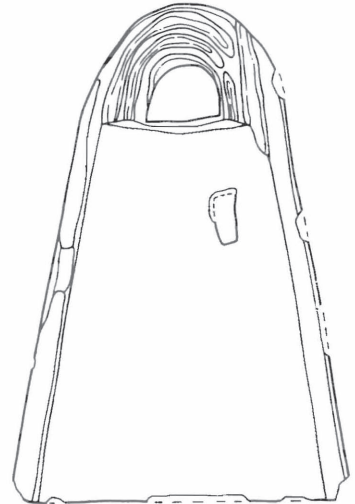
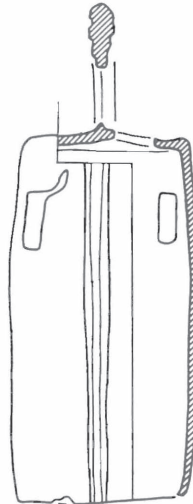
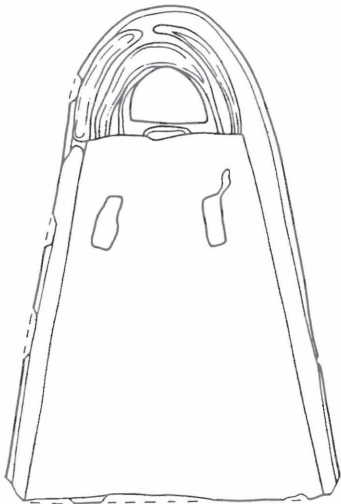
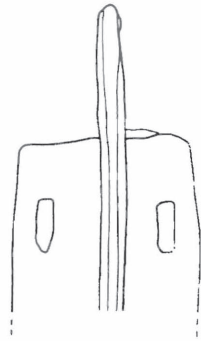
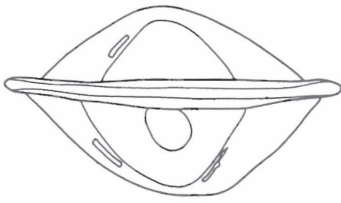
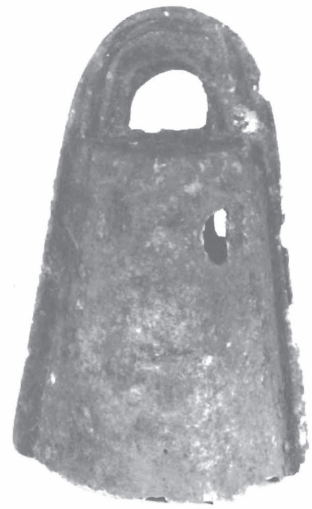


第3図 278号住居跡平面図

(1: 2号銅鐸, 2: 管玉, 3: ガラス小玉)

身上端部（舞部）の長径3.3cm、短径3.2cmで菱形に近い。鐸身下端部（裾部）は長径5.9cm、短径3.8cm（A面の裾部がつぶれている。復元3.5cm）で、舞部とは軸長が逆になる。鐸身には幅5～6mmの鱗がめぐっている。厚さは、鐸身で2.1～2.3mmと薄い、鈕では3.9～4.8mmと厚い。鱗では3～3.5mmである。朱塗りの痕は見られない。A面とB面の正面の形は異なっており、A・B面の合わせ目はややずれている。鈕の形状は兜形を呈しており、断面は扁平である。銅鐸の現存重量は約137gを計る。A・B面ともに舞部から裾部への開きは大きい、鐸身の側面は寸胴にちかく、舞部から裾部へほぼ直線的に移行する。裾端部が多少すぼまるが、これは土圧による歪みの結果と思われる。鐸身内面に凸帯はない。舞孔は1孔でA面側にあり、9.6×7.9mmを計り、楕円形を呈している。舞孔の周囲には鑄放したときに生じた立ち上がりが見られる。A面は、裾部が多少へこんでいる他に歪みはなく、欠損部分もない。左の型持孔は、欠損部分があるが4×12mmと推定される。右の型持孔は4×10mmで完存しているが、右上に湯冷によって生じたと思われる鑄巣が見られる。鈕には文様的な隆起線が見られるが、鈕の上部では「∞」字状になっている。隆起線の幅は一定していない。鱗は鈕から裾端部まで続いている。鈕と鱗の右側では隆起線が続くが、左側では切れている。B面は、A面に比較して歪みなども見られず、完存している。型持孔は右側の1つだけが穿たれているが、左側の対になる場所は、少しへこんでいるように観察でき、左右両方に型持孔を鑄だすつもりであったと推測される。型持孔は4×10mmで、A面と大きさや形状は同じである。鈕にはA面と同様に隆起線が見られる。鱗は裾部分から鈕の部分まで見られる。A面側の鈕・鱗には微隆起線が見られるが、鱗部の微隆起線は全周せず、左側では途中で切れている。右側の微隆起線は裾まで認められる。

管玉 銅鐸出土地点に近接する浅い落ち込みから出土しており、床面から8cm下で検出された。全体の約1/3程の破片で、割れ口は古く、この他の破片は検出されていない。径1.49～1.55cmで、現存長2.15cm、孔径は、0.49～0.5cmである。色調はくすんだ灰緑色を呈し、石材はケイ質ケツ岩である。表面はかなり丁寧に磨いており、光沢がある。

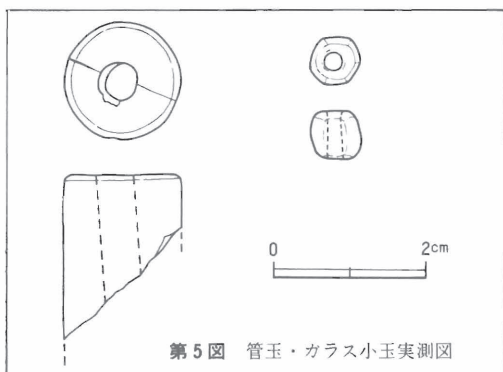


第4図 2号銅鐸実測図



同様な管玉の完形品が1号銅鐸と伴出しており、注目される(註10)。

ガラス小玉 北東端に位置する小土壌内から出土した。土壌の検出面からの出土で、下層からは壺形土器が出土している。ガラス小玉は、長さ0.6cm、径0.58~0.64cm、孔径0.17cmである。内部気泡の動きはなく、ガラス曲面に気泡痕が露出しており、外面には弱い稜が認められる。緑を帯びた青色を呈し、孔口と気泡痕には朱が付着している。



第5図 管玉・ガラス小玉実測図

その他の遺物 ガラス小玉の出土した小土壌の下層から、古墳時代前期の壺形土器口縁部が出土している。頸部に突帯をもち、口唇部・頸部突帯上に楯状工具によるキザミが施されている。口縁部外面の段には山形文が施されている。

5. 銅鐸・小型銅鐸の分類と性格

川焼台遺跡から出土した2点の「銅鐸」を、いわゆる「銅鐸」と同一視出来ないことはいうまでもない。そこで、「銅鐸」・「朝鮮式小銅鐸」を先学の研究から検討してみたい。三木文雄は銅鐸の文様構成から、銅鐸を8類型に分類し、銅鐸の細分を試みた(註11)。小林行雄は、多種の銅鐸が埋置されている例から、銅鐸を保有していた小集団が次第に統合され、それにもなって銅鐸も集中されていったものと考え、弥生時代後期に始まった古代国家形成の萌芽として位置づけた(註12)。酒井龍一は、「銅鐸」に施されている文様は銅鐸に内在する「モノ」をつなぎ止める結果を表現しているとした(註13)。春成秀爾は、畿内地方における多種の銅鐸埋置例を分析し、それら集団の境界に埋めたものとした。「銅鐸」は「穀霊」を意味し埋置・埋納することによって「稲霊」をつなぎとめ、

外部からの悪しきものの侵入を排除するためであったとした(註14)。田中琢は銅鐸を「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」に大別し、古い銅鐸は揺り動かして、音を聞くことが目的であったが、次第に銅鐸自身の大形化が進み、それに伴い装飾が加えられて次第に置いて見るための銅鐸になったとした(註15)。佐原真は、銅鐸の鈕の変化に注目して型式学的側面から分類をこころみた(註16)。菱形の断面を持ち実用的で、使用に堪えられる鈕をもつ銅鐸を菱環鈕式銅鐸とし、鈕の外縁に装飾的な部分が加わったものを外縁付菱環鈕銅鐸(外縁付鈕銅鐸)とした。そして、鈕の内外縁に装飾部分を持つものを内外縁付菱環鈕銅鐸(扁平鈕式銅鐸)、外周や文様の境を突線によって構成するものを突線付扁平鈕式銅鐸(突線鈕式銅鐸)と4類に大別し、最古段階・古段階・中段階・新段階と呼んだ。新段階には三遠式銅鐸が製作され、その要素を取り入れ最終段階には近畿式銅鐸が作成されたとした。そして、突線鈕1式以前の銅鐸を「聞く銅鐸」、突線鈕2式以後の銅鐸を「見る銅鐸」と分類した。「銅鐸」の祖型論については三木・佐原等の研究があり、「朝鮮式小銅鐸」からの系譜を求める説(註17)、「中国銅器」にその系譜を求める説(註18)等出されているが、弥生時代前期から中期に「朝鮮式小銅鐸」にその系譜を求める説が定説になりつつある。銅鐸は、集落から離れた尾根上などから埋置された状態で出土した例が多く、意識的に破壊されて出土した例(註19)や飾耳が単独で出土した例(註20)がある。これらは新段階のもので、銅鐸が完形品でなければならないという必然性がなく、青銅品を保有することに意義があったことを示している(註21)。銅鐸の終えんについては、先小林行雄によると弥生時代後期に、小集団の統合と軸を一にしているとし、小集団間の紐帯として銅鐸保有という行為の必要性がなくなった時に、初めて埋置・廃棄されたものと考えている。新たに発生した集団間の紐帯が、政治的権力関係であり、具象化したものが古墳であるとしている(註22)。「小型銅鐸・小銅鐸」の祖型・分類についても多くの研究が発表されている(註23)。野口義麿は、「小銅鐸」のなかに、銅鐸の小型品と銅鐸の形をした銅製品があることを指摘した(註24)。佐原真は、「小銅鐸」を分類し、銅鐸の小型品を「小型

No.	名 称	出 土 地	総 高	鈕 高	鈕 高	鐸 身 高	鈕 断 面	鏤	型 持 孔		内 凸 帯	文 様	出 土 状 況	時 期 (属 葉)	備 考	文 献
									A	B						
1	開 峯	静 岡 原 町	7.9	1.7	6.2			×	2	2	1	×	丘陵のやや内側		26	
2	陣 ヶ	静 岡 吉 原 市	6.0	1.5	4.15			×	2	2	1	×	古墳石室	後	26	
3	志 那	滋 賀 草 津 市	12.6	3.2	9.3	扁平		有	×	×	1	有	湖岸(包含層?)	?	36	
4	有 東 第 一	静 岡 静 岡 市	6.35	1.0	5.35			×	2	2	1	×	集 落 跡	?	46	
5	大 南	福 岡 春 日 町	10.1+α	1.9+α	8.2			×	2	2	2	有	溝(空 壕)	弥 中~	34	
6	田 間	栃 木 小 山 市	10.25	2.7	7.55	扁平		有	2	(2)	2	×	集 落 跡	弥 ~	24	
7	本 郷	神 奈 川 海 老 名 市	8.2	1.6	6.6			?	?	?	?	?	住 居 跡	古 前	47	
8	下 市	瀨 岡 山 彦 合 町	6.6	1.9	4.7	扁平		有	2	2	2	×	井 戸 跡	弥 後~終 末	32	
9	東 郷	鳥 取 東 郷 町	9.25	1.65	7.6	扁平		×	2	2	1	×	丘	?	48	
10	長 瀬 高 浜	鳥 取 羽 合 町	8.8	2.3	6.5	扁平		有	2	2	1	有	住 居 跡	古 前 末	33	
11	天 神 台	千 葉 市 原 市	6.8	(1.7)	4.7			×	2	2	1	×	住 居 跡	古 前	43	
12	浦 志	福 岡 前 原 町	6.55	1.2	5.35			×	(1)	(1)	(2)	×	溝	弥 後 末 ~ 終	23 e	
13	草 山	三 重 松 阪 市	5.3+α	1.0	4.3+α			×	1	?	2	×	溝	弥 後	38	
14	川 焼 台 1 号	千 葉 市 原 市	12.25	3.25	9.0	扁平		有	2	2	1	×	住 居 跡	弥 末~古 前	1	
15	川 焼 台 2 号	千 葉 市 原 市	9.9	2.5	7.3	扁平		有	2	1	1	×	住 居 跡	古 前		
16	多 武 尾	大 分 大 分 市	5.5+α	0.9	4.7+α			×	?	?	1	×	溝	後 朝鮮式系小銅鐸	51	
17	余 野 (神 明 下)	愛 知 大 口 町	5.6+α	1.3	4.3+α			×	2	2	?	有	集 落 跡	後 鏡 ?	35	
18	愛 野 向 山	静 岡 袋 井 市	7.5+α	1.4+α	6.1+α			×	2	1	×	×	墓 跡 (?)	後 銅鐸を舌として使用	37	
19	矢 倉 川 口	滋 賀 彦 根 市	5.5	1.5	2.7			×	2	2	2	×	包 含 層	後	30	
20	今 宿 五 郎 江	福 岡 福 岡 市	13.5	2.4	11.1			×	2	2	?	?	溝	弥 中 末 ~ 後 初	29	
21	江 原	德 島 脇 町	6.3	1.1	5.2			×	2	?	1	×	?	?	49	
22	大 谷 (鑄 型)	福 岡 春 日 町	17+α						?	?	?	?	~	弥 中 後 朝鮮式系小銅鐸	28	
23	岡 本 (鑄 型)	福 岡 春 日 町	5.9					×	?	?	?	?	住 居 跡	弥 中 朝鮮式系小銅鐸	50	
24	別 府	大 分 宇 佐 市	11.6					×	1	1	1	×	住 居 跡	後 朝鮮式小銅鐸	51	

表 小銅鐸・小型銅鐸一覧表 (×:無し, ? :不明, +α :破損部分あり)

銅鐸」、銅鐸の形状に似た青銅製品を「銅鐸形銅製品」とよび、これをさらに銅鐸の誕生前にその先駆的なものとして作成されたものを「銅鐸試作品」、銅鐸を模倣して作られたものを「銅鐸模倣品」とに分類した(註25)。

6. 川焼台1・2号銅鐸について

川焼台遺跡出土の「小型銅鐸」は、同一遺跡から2点が出土した例として全国で唯一のものである。両者は約100m離れて出土した。1号銅鐸は、草刈32号墳の調査中に出土したが、その後の検討によって、古墳時代前期の住居跡床面からの出土が確認された。伴出遺物として、ケイ質ケツ岩製の、径1.35cm、長さ5.2cmの管玉が出土している。鐸身の文様は、綾杉文によって充足された四区あるいは六区袈裟たすき文銅鐸である。伴出遺物から、古墳時代前期の遺構に廃棄されたものと考えられる。2号銅鐸は、集落の中央部の竪穴住居跡からの出土である。鈕に隆起線がみられるが、鐸身に文様は認められない。銅鐸に朱塗りの痕はないが、伴出したガラス小玉に朱の付着が見られる。1号鐸・2号鐸ともに、鈕に隆起線が見られることなどから扁平鈕あるいは突線鈕銅鐸の系譜に連なるものと考えている。また、両者にケイ質ケツ岩製管玉の伴出が確認されており、注目にあたいる。

7. 小型銅鐸・小銅鐸の分類

管見した「小銅鐸・小型銅鐸」は、20例あまりに達する。これらの小型銅鐸・小銅鐸は「全体のプロポーシヨ」・「鈕の形状・断面形」・「鱗の有無」・「文様の有無」によって、幾種類かに分類が可能である。

大きさ 滋賀県志那出土鐸は高さが12.6cm(註26)を計り、最も大きい。出土状況が「銅鐸」に類似することから、佐原・春成は志那鐸を「銅鐸」の範ちゅうに含めている(註27)。次に大きいのが川焼台1号鐸で12.25cmを計る。鑄型では福岡県大谷遺跡出土品の総高17cm(註28)があり、朝鮮式系小銅鐸では福岡県今宿五郎江遺跡出土品の13.5cm(註29)がある。総高の判明するもので最小は、滋賀県矢倉川口遺跡出土鐸の5.5cm(註30)である。鑄出した後の整形を考えると、総高の差にそれほ

どの意義を求めることは出来ない。たとえば、川焼台1号鐸と2号鐸を比較すると、1号鐸の裾部は若干外反しているが、この外反部分を整形段階で削り取ると2号鐸と鐸身の高さはほぼ一致する。このことから、単純に総高・鈕高・鐸身高による分類は無意味であることが分かる。

鈕と鱗の形状 鱗と密接な関係がある。鱗を持たない鐸の鈕断面は丸形か菱形を呈しているのにたいして、鱗を有するものは扁平が多い。鱗を有するものは、志那鐸・栃木県田間出土鐸(註31)・岡山県下市瀬出土鐸(註32)・鳥取県長瀬高浜出土鐸(註33)・川焼台1号鐸・川焼台2号鐸の6例である。

文様を有するもの 志那鐸・福岡県大南出土鐸(註34)・長瀬高浜鐸・田間鐸・川焼台1号鐸・川焼台2号鐸の6例がある。田間鐸・川焼台2号鐸の鐸身に文様は見られないが、鈕に隆起線がみられる。この隆起線は、扁平鈕あるいは突線鈕付銅鐸にみられる隆起線あるいは突線の系譜に連なるものと考えられる。大南鐸・志那鐸・川焼台2号鐸には、袈裟たすき文が見られる。大南鐸は突線鈕を模したものと考えられる。志那鐸の鱗部から鈕部には鋸歯文がみられる。川焼台1号鐸の鐸身と鱗には綾杉文が、鈕には隆起線が見られる。志那鐸は外縁付鈕銅鐸の、川焼台1・2号鐸・田間鐸は扁平鈕あるいは突線鈕銅鐸であることを物語っている。

内凸帯を有するもの 志那鐸・大南鐸・長瀬高浜鐸・愛知県余野(神明下)出土鐸(註35)の4例がある。「銅鐸」にも内凸帯の見られないものがあり、不可欠のものではない。内凸帯を持たない銅鐸と舌が伴出している例があり、舌の出土からも検討する必要がある。

朱塗りが確認できるもの 川焼台1号鐸だけであるが、同じ川焼台遺跡出土の2号鐸と伴出したガラス小玉に朱の付着がみられ、小型銅鐸と朱の関係が注目される。「銅鐸」にもすべて朱塗りが施されているわけではなく、類例は少ない。

出土遺構 静岡県陣ヶ沢出土鐸(註36)が古墳の石室内出土とされているが、混入の疑いを拭いきれない。出土遺構の確認出来たものは、竪穴住居跡や溝、井戸のような生活跡からの出土がすべてである。また、遺物散布地からの出土があるがこれも生活跡からの出土と考えてよからう。このよ

うに生活跡からの出土は、小型銅鐸・小銅鐸の特徴と考えられ、小型銅鐸・小銅鐸の性格や使用方法・廃棄の理由を暗示している。静岡県愛野向山出土鐸（註37）は、調査者によると埋葬施設に伴うものとされる。出土状況は、川焼台1号鐸と類似し、細尾根上である。

舌の伴出 長瀬高浜鐸では石製舌が伴う可能性があり、愛野向山鐸では銅鏃が振り子の状態で鐸身内部から出土している。三重県草山出土鐸（註38）は同じ溝から銅鏃が出土している。ちなみに、川焼台遺跡からも銅鏃が1点出土している。福岡県浦志A地点出土鐸（註39）は、銅製の舌が鐸身内部から出土している。これらの例から「小型銅鐸・小銅鐸」にも振り鳴らすという行為が行なわれていたことがわかり、「聞く銅鐸」であったと考えられる。

廃棄・埋没された時期 使用された時期については、明確な資料がない。廃棄されて埋没した時期については、明確に時期の判明するものがある。それらは弥生時代中期から古墳時代前期の間である。

8. まとめ

小型銅鐸・小銅鐸・朝鮮式小銅鐸の分類に「鈕の形状・断面形」・「鏃の有無」・「文様の有無」が重要なことが明確になってきた。「銅鐸」が鈕の形状によって型式学的にその変化・流れが追えるという研究成果からも、小銅鐸における「鈕の形状・断面形」は重要な問題である。また鈕と鏃は密接な関係をもっており、鈕が扁平であるものは、鏃を有するという必然性が認められる。そのうえ、鈕・鏃に文様を持つものがあり、鈕・鏃を表現しているものには文様を施す意識的意図があったものと考えられる。このことから、文様を持ち鈕が扁平で鏃を有するものを抽出すると、大南鐸・田間鐸・下市瀬鐸・長瀬高浜鐸・川焼台1号鐸・川焼台2号鐸の6例が該当する。これらをいわゆる「銅鐸」と区別するために「小型銅鐸」と呼び、以外を広義の「小銅鐸」と呼びたい（註40）。これらの小型銅鐸は、詳細に観察するとさらに細分が可能である。正面の鐸身が裾で外反するものとほぼ直線的に裾端部へ移行するものがある。前者には、大南鐸・下市瀬鐸・長瀬高浜鐸が該当し、

後者には田間鐸・川焼台1号鐸・川焼台2号鐸が該当する。前者はさらに地域的細分が可能であるが、仮に「西日本タイプ小型銅鐸（註41）」と呼び、後者を「関東タイプ小型銅鐸（註42）」と呼んでおきたい。関東タイプ小型銅鐸は、すべて鈕に隆起線がみられる。鈕の文様を意識的に鑄出すことに意義を求めるとすれば、この隆起線はこれら小型銅鐸のモデルとなった銅鐸を知る手掛かりになると思われる。このように鈕の形状や隆起線の付加・全体のプロポーションから、関東タイプ小型銅鐸は突線鈕付銅鐸の系譜を引くものと考えられまいか。出土地による細分も可能であるが別稿にゆずりたい。これらの小型銅鐸の使用された時期は不明であるが、すくなくとも廃棄され埋没されたのは、関東タイプ小型銅鐸はすべて古墳時代前期と断言できよう。

次に、川焼台遺跡出土の小型銅鐸について、その歴史的背景について考えてみたい。小型銅鐸は2点とも古墳時代前期に属することが分かった。川焼台遺跡の南方約7kmの天神台遺跡（註43）からは小銅鐸が出土しており、近くには畿内第5様式垂式に平行するとされる神門4号墳（註44）・5号墳（註45）が所在している。しかし、天神台遺跡出土銅鐸と伴出した資料や、天神台遺跡周辺の調査がされていないながら、その結果が未だに公開されていない段階では不明な点が多く、両者の詳細な比較はできない。ただ、川焼台遺跡の小型銅鐸使用者集団は、在地的な性格を強く持った集団であり、この地域が古墳築造集団の一員として組み込まれてきたとき、2個の小型銅鐸は廃棄されたと考えたい。

最後に、小銅鐸について幾つかの問題を指摘しておきたい。舌の伴出は2例が知られ、銅鏃を舌としたものと、その可能性があるものを含めると4例が知られている。伊勢湾周辺においては愛野向山鐸を始めとして、銅鏃を舌として使用している例が見られる。この地域は三遠式銅鐸の発達した地域であり、小銅鐸の使用については他の地域とは異なっているようにみられる。小型銅鐸は本来さらに数多く存在していたと考えられまいか。出土が確認されない地域は、地金として再利用したとも考えられる。銅鏃の出土はその例証かもしれない。また、東日本の小銅鐸・小型銅鐸出土地

には、その近接地に前方後方型周溝墓が見られる例があり、弥生時代から古墳時代への社会的変化の激動を暗示している。これら小型銅鐸の出土は、弥生時代後期から古墳時代前期に見られる。東日本における土器群の動きと密接な関係があるものとされよう。

末筆ではあるが本稿をなすにあたって、1号銅鐸の調査にあられた榊原弘二・山口典子氏からは文献・その他について、多くのご教示をうけた。また、阪田班長をはじめとして2班の調査研究員諸氏からは、多くの協力をうけた。合わせて感謝の意を表したい。

本遺跡の調査は、昭和59年度金丸誠・金子進、昭和60年度相京邦彦・白井久美子・金子進が担当した。本稿は3名の討議をもとに、伴出遺物の項を除き相京が執筆した。

註・参考文献

- 1) 榊原弘二・山口典子「市原市川焼台遺跡出土の小型銅鐸について」千葉県文化財センター研究連絡誌7・8合併号 1984.3.
- 2) 千葉県文化財センター「草刈遺跡A区」昭和54・55年度調査。1979・1980。
千葉県文化財センター「草刈遺跡B区」昭和55年度調査。1980。
千葉県文化財センター「草刈遺跡D区」昭和57・58年度調査。1982・1983.
- 3) 千葉県文化財センター「草刈遺跡F区」昭和60年度調査。1985.
- 4) 千葉県文化財センター「草刈3号墳」昭和55年度調査。1980.
- 5) 須田勉「古代地方豪族と造寺活動」『古代探叢』1980.
- 6) 栗本佳弘他「市原市大厩遺跡」房総考古資料刊行会 1974.
- 7) 栗本佳弘他「市原市菊間遺跡」房総考古資料刊行会 1974.
- 8) 註7に同じ
- 9) 註7他を参照
- 10) 調査担当者の榊原弘二氏のご教示による。
- 11) 三木文雄『流水文銅鐸の研究』1974.他
- 12) 小林行雄『女王国の出現』1967.
- 13) 酒井龍一「銅鐸(邪気と封じこめのオブジェ)論」『摂河泉文化資料21』1980.
- 14) 春成秀爾「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告1』1982.
- 15) 田中琢「“まつり”から“まつりごと”へ」『古代の日本5』1970.
- 16) 佐原真「銅鐸の鑄造」『世界考古学体系2』1960.
- 17) 佐原真「銅鐸の始まりと終わり」と『展望アジアの考古学』1983.
- 18) 三木文雄「横帯文銅鐸考」『古文化談叢8』1981.4.
- 19) 池田正男「但馬国日高町久田谷出土の銅鐸」『月刊文化財』1978.11.
- 20) 水野正好「もう一の銅鐸観」『日本歴史367』1978.12.
- 21) 銅鏡・銅鏃などの青銅製品の所有と、相通じる面がある。
- 22) 註12に同じ。
- 23) a 田村晃一「朝鮮半島からみた日本の青銅器」『MUSEUM 311』1977.
b 小田富士雄「宇佐の朝鮮小銅鐸」『日本の中の朝鮮文化34』1977.
c 宇野隆夫「銅鐸の始まり」『小林行雄博士古稀記念論文集』1982.
d 高倉洋彰「九州の銅鐸」『宇佐一大陸文化と古代史』1978.
e 常松幹雄「浦志遺跡A地点」『前原町文化財調査報告書15』1984.
- 24) 野口義麿「栃木県小山市田間発見の銅鐸について」『考古学雑誌52-4』1967.
- 25) 註16に同じ
- 26) 梅原末治「近江発見の小銅鐸」『人類学雑誌50-10』1935.10.
- 27) 佐原・春成「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナル201号』1982.11.
- 28) 丸山康晴「春日丘陵出土の鑄型」『ふるさとの自然と歴史112』1980.他
- 29) 二宮忠司「福岡市西区今宿五郎江遺跡の調査」昭和60年度九州史学会考古学部発表資料1980.12.8.
資料の入手にあたっては福尾正彦氏、田崎博之氏にお世話になった。

- 30) 浜崎悟司 「矢倉川口遺跡出土の小銅鐸について」 1985.
資料の入手にあたっては小竹森直子氏にお世話になった。
- 31) 註24に同じ
- 32) 新藤晃一 「下市瀬」「中国縦貫道建設に伴う発掘調査 1」 1973.
- 33) 清水真一 「鳥取県東伯郡羽合町・長瀬高浜遺跡出土の小銅鐸について」 『考古学雑誌 68-1』 1982.6.
- 34) 鈴木・渡辺 「福岡県筑紫郡春日町弥生遺跡出土の銅鐸」『日本考古学協会25回大会発表要旨』 1960.4.
- 35) 宮川芳照 「弥生時代 銅鐸」『大口町史』1982.
- 36) 後藤守一 「駿河浮島村出土の小銅鐸」『考古学雑誌 23-4』 1933.4.
- 37) 袋井市教育委員会 「愛野向山古墳群B群・愛野向山遺跡現地説明会資料」 1980.
資料の入手および現地の見学にあたっては松井一明氏にお世話になった。
- 38) 松阪市教育委員会 「草山遺跡発掘調査月報 No.10」1985. 3.
資料の入手にあたっては杉谷政樹氏にお世話になった。
- 39) 註23eに同じ
- 40) 鈕が扁平でなく、鑿を有しないものを総称する。細分が可能である。
- 41) 形態・出土地により細分が可能である。
- 42) 3例のみであるが、鑿身の文様の有無等による細分が可能と思われる。特に、川焼台2号鐸と田間鐸とは、形状的に類似する。
- 43) 浅利幸一 「千葉県市原市天神台遺跡出土の小銅鐸」『考古学雑誌 68-3』 1983.2.
- 44) 田中新史 「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代 63』 1977.12.
- 45) 田中新史 「出現期古墳の理解と展望—神門五号墳の調査と関連して—」 『古代 77』 1984.6.
- 46) 杉原荘介 「弥生式文化遺跡調査の大勢」『日本考古学協会年報 1』 1951.10.
- 47) 伊藤秀吉 「銅鐸の発見された海老名町本郷遺跡」『月刊文化財』 1971.8.
富士ゼロックス株式会社「海老名本郷遺跡」 1979.1.
- 48) 名越・甲斐 「鳥取県東郷町出土の小銅鐸」『考古学雑誌 59-2』 1973.11.
- 49) 三木文雄「小銅鐸の系譜」『MUSEUM 184』 1966.7.
- 50) 丸山・平田 「須玖・岡本遺跡」『春日市文化財調査報告書 7』 1980.3.
- 51) 小田富士雄 「多武尾遺跡調査概報」 大分市教育委員会 1982.
(第2班 千原台事務所)

有吉北貝塚における中世土壙墓とその出土遺物

——中世初期土壙墓の様相について——

笹生 衛

はじめに

昭和60年度の有吉北貝塚の発掘調査により中世初期の土壙墓が発見され、そこからは、和鏡を始めとする数点の遺物が出土した。中世初期の土壙墓の発見例は、千葉県下においては、まだ少なく、その細かな様相については、殆ど不明であると言える。そこで、ここでは有吉北貝塚で発見された土壙墓と出土遺物の紹介をすると同時に、今回報告する土壙墓のように和鏡が出土した土壙墓の様相、性格についても若干の考察を行ってみること

にしたい。

2. 土壙墓の概要と遺物出土状況(第1図)

土壙墓は、台地南側の支谷に面する台地上で、平坦部から緩斜面に移行する標高約38mほどの地点に立地している。土壙墓が発見された地点は、鬼高期の住居跡が集中している場所であり、土壙墓は、重複した2軒の住居跡の覆土中に掘り込まれていた。

土壙墓の平面プランは、約1.2m×1.6mの長方